

本市」という所に橋が架かっていました。その橋の近くに島みたいな中洲があったんですよ。その中洲に自分たちでヒョッコリヒョコタン島なんて名前をつけました。NHKで人形劇をやっていました。しょう。あれのまねをして、いかだみたいなものを作り川の真ん中まで遊びに行ったりしていました。大人にみつかるかと叱られるものでこっそりかくれて。しかし、何度もみつかって叱られました。また、家の隣にさといもの畑がありました。が、はっ葉がすごく高かったんですよ。その中に入ると背がかくれてしまうものでよくかくれんぼをして遊んだりしました。また芋の葉にブスブス穴をあけて遊んだり、稲刈りの終わった後に横んであるわらの上に乗ってバラバラにしたり、悪いことばかりして遊んでみたい。

熊本市内では、どこから見ても金峰山が見えますね。東京はそういう意味では砂ぼくのような感じで、回りにぜんぜん山が見えないのですよ。こちらに引越してきた当初は方角がわからずこままりました。熊本でしたら金峰山がこつちに見えるからこちらが北だとかとかわかります。寂しかったですよ。

チンカチンとなっちゃって。家の両親にしてみてもそうですね。自分たちは普通に会話しているつもりでも、一歩離れて隣の室から聞くとケンカしてるみたいです。本当に、言葉がなんと言うんだろう驚きますよ。特に知らない人なんか。そしてお世辞がへたなんです。ぶっくら棒で飾り言葉がなく、そういうところから足を引くばるとかというふうにとられるんじゃないかね。

反応のあるステージ

一番の演出家というのは、ある意味でお客さんなんです。ベストコンディションでステージに立ちたいとたえず心がけているんですが、ときには体調が悪いこともありますし、会場の関係、音響効果とかいろいろあるんですよ。そんなとき、大きな拍手や掛け声を頂いたりするとお客さんが聴いて下さる力がはいる、体調とか音響などの困難をのりこえてしまっただけなんです。そういう意味でお客さんと一体となったステージ、反応のあるステージが最高ですね。反応のないステージというのは寂しいものです。何度か経験しましたが。

かしいです。東京でからしれんこんを作ろうと思ってもうまくいかないんですよ。れんこんの穴が大きすぎるんですね。芋の煮ころろがしにしてみてもさといものおいしいのがないし、また、グゴ汁はさつまいもをメリケン粉でまいたものを入れたのが好きですが東京のさつまいもは大きいです。グゴ汁が食べたらい。(笑い)

信じてくれて

家が八百屋さんを始める前は、おばあちゃんと一緒に城山上代町(熊本市)に住んでいました。おばあちゃんの家がバス停とタバコ屋さんだったもので、切符やタバコを売る窓口のところでよく大きな声で歌っていました。その頃おばあちゃんに習ったのが、船頭小唄”なんです。いい歌ですね。いまでもよく歌います。こういうことで、小さい頃から大変歌が好きで、また、歌い手になりました。普通言うように自分の夢がかなうということは大変むずかしいことですが、私の場合それが実現してとても幸せと思っています。

歌い手になるということについて、両親は賛成も反対もしなかったんです。と

ファン層

ファン層は広いです。小さい子からお年寄まで男女を問わず、意外と、人畜無害”なんじゃないでしょうか。あんまりアクがないというか。よく言われるんですよ。『うちの女房に似てる』とか『隣の何とかさんに似てる』と。顔もよくある日本人のパターン的な顔をして、スタイルだって抜群にはよくありません。警察のボスターのお仕事をさせてもらったんですが、そのとき、警察の方が『どうして石川さゆりさんが選ばれたのかわかりますか。』と言われたんです。『さあ』と答えましたら、『こんな交通安全のボスターはあんまりワアという人がやって交通安全を呼びかけても、何かよそごとみたいでピンとこない。』とおっしゃるんですね。でも私がやると『あつ、隣のお姉ちゃんがいる』という感覚で見てもらえると。あ、あ、私は、平均的な感じなんだなあと思ったりします。そういうことでいろんな方がショーンを見てくださいます。平均的のパターンでよかったです。(笑い)

自然との調和を

いいますのがうちの家は、小さい頃から当人まかせなんです。自分がやれる事だったら何でもやるといい。そのかわり、必要以上の援助はしてくれない家庭なんです。それで幼稚園の頃から、味噌天神にピアノのけい古に行っていたんですが、その時でも自分で通えるんだつらという感じだったんです。一人でバスに乗り、電車に乗り継ぎ通いました。また、必要以外にお金もくれないんです。本当にバスターと電車賃だけ。ある日、熊本駅まできて、駅前の丸菜、今なくなってユニードと言ってますかね。そこに行つたところなぜかすごくほしい下敷があったんです。ほしくて、ほしくてたまらず買ったもので帰りのバス代がなくなり歩いて帰つたこともあります。

最近、あんがいこの家庭でも子供にかまひすぎる感じがありますよ。そういう意味では家の親は、子供を信じてくれたというか、やりたい事はなんでもやらせてくれました。このことは、自立の面で大変プラスになりました。感謝しています。

肥後気質

昭和四十八年三月二十五日にデビュー

熊本は緑がいっぱいあって、空気がきれい。水がたいへんおいしいと言われています。小さい頃の熊本のイメージを大事にしたいんでこれらをつつまでも保てる状態をいいほしいなあと思っています。帰つたときに、『オツ、東京とあんまり変えない』と、こうなつたら寂しいなと思います。花畑公園の大きなクスノキとか、熊本城のすくすくきれいな桜とかやつぱり忘れられないですよ。白川のきれいな流れが多摩川みたいにブクブクとあわが浮いてたりしたらいいですね。帰るたびに大きなビルや、デパートが建つてますけど。こうやって離れているものは、いつまでも自分の思い出を残しておきたいと思うけど。やつぱり住む人達は、それも言つてられないし、より住みいいというか、合理的に生活できるよと考えられるでしょうし、むしろかきいすね。しかし開発される場合は熊本の豊かな自然を保つというか自然と調和する方向で考えてもらいたいですね。

また、方言といいますが、熊本弁というのをいつまでも絶やさないでほしいと思います。熊本弁はいいですよ。暖かいというのをぬくかあと言いますね。

したんです。熊本に帰りまして。水前寺体育館だったのです。故郷でデビュー記念発表会を開くことができ、また、本心に心から熊本の方たちに『頑張れよ』と言われてスタートできたことなど非常にしあわせに思います。

五十二年に『津軽海峡冬景色』がヒットしました折に、司会の方に、よく堪えて三年忍んで二年とかすばらしい紹介を頂いていたんです。しかし、当人にしてみれば意外と過ぎてしまえばそんな事もあつたかなあと、また、それが楽しい事にもなります。苦勞を感じる歳でもなかつたんですよ。二十歳前ですから。

熊本の人たちというのは、地元の人が出世しよう、何かこう非常に良い方向に進もうとすると、よく足をひっぱるといふ言葉を聞くんですね。でも私の場合ぜんぜんそういう事はなく、田舎の人達も熊本の方達もまた、水前寺清子さんをはじめ先輩の方も本当に応援して下さいました。しあわせに思っています。

熊本の人たちは、おなかの中にブスブスとこもつてられないんですよ。だから思ったことをワァーと言っちゃうんですよ。それでもって、いたるところで

歌は気分よく大きな声で

歌はうまく歌おうと意識するとだめなんですよ。あんまり細かいことはかき気になつて、すごくつまらない歌になつてしまします。だから、おもいきり楽しく、気分よく歌うことですね。歌を仕事にしている人はいろいろ考えなければいけないでしょうけど、そうでないかぎりは、人の迷惑かえりみず、自分本位でそれが上達の方法ですね。のど自慢を聞いていてもそのほうが、より気持ちよく、上手に聞えるみたいですね。

また、歌は小さい声で歌わないことですね。大きな声で歌わなくちゃいけません。テクニクなんか気にしないで。

